

ボトル・メッセージはどこに配達されたか

——中島直人「布哇生まれの感情」を読む

黒田 俊太郎

(キーワード…中島直人／日系アメリカ人二世／二世教育／二世問題／マージナル・マン／ボトル・メッセージ)

一、問題の所在

中島直人(一九〇四～四〇)という作家がその生涯に執筆した小説は、二〇篇にも満たない。だが、それらの小説群は全て、日系アメリカ人二世としてのアイデンティティをめぐるテキストだったといえる。

日本国籍の両親のもと、ハワイオアフ島ワイパフで出生した中島は、日本とアメリカ、両方の国籍を保有する二重国籍者である。一九一九年に日本に渡り、日本への「憧れ」を表出した小説「布哇生まれの感情」(『文芸都市』一九二九・七)で実質的なデビューを果たした後^①、ハワイでの自身の体験をモチーフとしたテキストだけを書いて、一九三六年にハワイへと帰っていった。

ハワイへと帰還する際に刊行された短篇集『ハワイ物語』(砂子屋書房、一九三六・一二)の「後記」で、中島は「この望郷の念は作品を書くことによつて決して削られることはなかった。常に同じ線に沿つて深まつてゐた。／＼ハワイは作者にとつて唯一の故里である」(三四七頁)と書きつけたように、日本語で書かれた一連のテキストは、確かに「望郷の念」で貫かれていたものの、感傷に終始するような類のものではなかった。それらは、自身のアイデンティティというテキストを入念に練り上げ、「唯一の故里」と思える場所に逢着するための切実な道程に他ならなかった。そこには、事後的にはあつたにせよ、日本や日本語という自己の一部を他者化^②疎外するという身を切るような究極の一手が準備されていたのであり、他者の言語と位置づけることを余儀なくされた日本語で、自

己のテキストを紡いでいくという、境界的かつ翻訳的営為を通して、「唯一の故里」の発見が目指されたのである。

そもそも、中島の両親がハワイに移民した一九〇二年から中島が日本へと渡る一九一九年頃のハワイをめぐる状況を鑑みても、ハワイが単なる「望郷の念」の対象^③楽園などではなかったことは明らかだ。ハワイがアメリカの準州となった一九〇〇年、ハワイの日本人移民数は六一、〇〇〇人を超え、ハワイの全人口の三九・七パーセントを占めるに至っていた^④。当時のハワイ社会は、ビッグファイブと呼ばれる五大財閥の「一握りの白人エリートが政治的・経済的・社会的權力を掌握しそれ以外の大多数が社会の底辺の労働者階級に属している」という極端な二極分離構造を形成していた^⑤が、日本人移民の多くはそうした厳しい労働環境に置かれた砂糖プランテーション労働者だったのであり、労働賃金も他のエスニック・グループ中最低の水準だった^⑥。またアメリカの準州となったことで、外国から契約労働者の受け入れを禁止するアメリカの契約移民禁止令が適用され、自由移民時代に突入したことにより、日本からの渡航手続きの容易なハワイを踏み台にしてアメリカ本土に渡るいわゆる(転航者)が続出したが^⑦、これがアメリカ本土及びハワイにおける排日運動激化の引き金を引く。すなわち、転航を禁止する一九〇七年移民法、労働者の移民を制限する一九〇八年の日米紳士協定、「帰化不能外国人」^⑧日系一世の土地購入を禁止するなどしたカリフォルニア州の一九一三年外国人土地法(第一次排日土地法)など、日本人移民を制限することを目的とした法整備が着々と進められていくことになるのである。

中島が生まれ、育ったハワイは、白人エリートによる植民地的収奪と、一九二

四年移民法（排日移民法）施行という一つの頂点に向けて亢進する排日運動との、血生臭い歴史過程を伏在させた場所に他ならない。そこはコロナイザーとコロナイズド、そして複数のエスニック・グループの移民たちが遭遇し争闘し、相互変容し合う「コンタクト・ゾーン」^⑥であり、中島の一連のテクストは、あろうことかそのような地政学的な場所を「唯一の故里」として定位していかなければならないという、厳しい課題を内包していたはずである。

作家となった中島は、自らが体験したハワイでの現実はもちろん、あの頃加熱していた排日運動が一九二四年移民法として結果すること、日本で待ち受けていた日系二世に対する差別のこと、それらすべてのことを知っていたのであり、一九二九年から開始される中島の文筆活動は、そうした歴史的堆積物の上に成立している。

本稿で中心的に検討していく「布哇生まれの感情」にも、日本への「憧れ」を口にする「少年」＝ユタカが登場するが、「少年」の陳述を直ちに語り手＝「私」の認識と錯覚してはならない。「私は十六歳になつたばかりのハワイ生れの少年でした」と語る語り手は、もう「少年」ではないからだ。そこには、日本を「憧れの母国」と空想した「少年」の日の「私」を、遠い未来から俯瞰するもう一人の「私」という存在が想定されねばならないだろう。

次節ではまず梗概を確認し、第三節では、二世のアイデンティティ形成に影響を与えたであろう、教育の問題にスポットを当てる。一九〇〇年代初頭の日系社会は、二世に対し、いかなる日本語教育・道徳教育を行ったのであろうか、その変遷をたどる。第四節では、二世が置かれていた「マージナル・マン」（ロバート・E・パーク）としての歴史的な性格について分析し、最終節ではそれらの問題を踏まえ、「布哇生まれの感情」で追究される二世のアイデンティティの主題について検討する。その際、ユタカのもとに配達されたポトル・メッセージの意味を読み解くことを、中心的な課題としたい。

二、「布哇生まれの感情」梗概

物語内容の時間は、スペイン風邪によるパンデミック（一九一八―一九一九）の事実が書き込まれることで、一九二〇年前後と推定できる^⑦。視点人物はハワイ生まれの一六歳の少年ユタカであり、これは先述したように語り手＝「私」の少年時代の姿だ。ユタカのモデルには、一九一九年来日した時、数えて一六歳だった中島本人が想定されていると考えられる。

舞台は、S・O丸の船上であり、ホノルル港を発つて四日目から、横浜港に接近し船上から富士山を目撃して、感動するまでの数日間の出来事が語られる。

ユタカは父親と死別したことを契機に、ユタカが二歳の時に一人で日本に戻っていた母親のもとに向かっている。ユタカは三等船室のベッドの上で、ホノルルの本屋で購入した『日本よろづ案内』を繰り返し熟読し、憧れの日本のイメージを膨らませている。そんな時、ふと住み慣れたホノルルの街のことが思い出されるが、その想念をかき消し、「そんなものは、船尾の白波と共に捨てて了へ。いま私は未だ見ぬ憧れの国―日本へ向つて進んでゐるのではないか」と思う。

ユタカのベッドは、三段ベッドの最上段だった。すぐ下には、ハワイ生まれで二〇歳のリサ子、更にその下には、リサ子の夫古上がいた。古上は、日本生まれで三五、六歳、ハワイの日本人小学校で教師をしていた。古上は、リサ子から冷たくあしらわれるといつも、リサ子には読めない「日本語」の書物を大声で読み上げた。

ユタカとリサ子は親しくなると、お互いの身の上話をするようになる。リサ子は、古上が「暴力によつて」「私をモノにした」こと、その時「ポルキー（葡萄牙人）」の恋人がいたが、自暴自棄になつて古上と結婚したことなどを話した。そして「私も実はユタカさんと同様、日本が見たい」という日本への強い思いを語る一方、横浜に着いたら夫から逃げ出して、東京に行くという計画を打ち明ける。

ある日ユタカは、親しくしていたボーイの上藤さんから、波間に漂流していたという銅製の円筒を渡される。円筒の中には「手紙」が入っていた。ポトル・メッセージの差出人は、日本を見たことのないロサンゼルス在住の日系二世、二一歳の十時三郎であり、「太平洋沿岸同胞諸君」に宛てられていた。内容は、二週間前にスペイン風邪で妻を亡くしたが、その喪失感を埋めるために、日本生まれの妻が教えてくれた「日本語」で「手紙」を書き、桐箱三個・木箱二個・円筒二本にそれぞれ入れて海に流した、というものだった。「手紙」にはさらに、「あなたをもつとも感動させた事柄は（ロマンズ大いに結構です）どんな事ですか？」という問いに応えて欲しい、とあった。

数日後、富士山を見たユタカは、その時の感動をしたためたスケッチブックの紙片を円筒に入れ、海に投げた。そこへ近づいてきたリサ子から、やはり古上の故郷である熊本に付いて行くことにしたと告げられる。

三、一九〇〇年代初頭における二世への教育内容の変遷

リサ子の日本語能力

「布哇生まれの感情」には、ユタカ・リサ子・三郎という、三人の日系アメリカ人二世が登場するが、これらの三人は、一九〇四年生まれの中島直人とほぼ同世代である。視点人物であるユタカの日本への期待・憧れといったポジティブな「感情」が描出される一方、ユタカの目に映った、「日本語」をめぐるリサ子・三郎の葛藤や怒り、そしてこだわりといったものを媒介として、二世のアイデンティティの主題が追究されている。そのため、ユタカ・リサ子・三郎という同世代の日系二世が、どのような日本語教育を受け、どれほどの日本語能力を有していたかということを、ハワイの日本語教育の歴史を参照しながら確認していく必要があるだろう。

梗概にも示した通り、リサ子の夫の古上は、リサ子から冷淡にあしらわれると、「日本語」の書物を大声で威圧的に読み上げるといふ行動に出る。古上は、こうした行動がリサ子のアイデンティティに揺さぶりをかけ、効果的にストレスを与え得ることを熟知していたということになるだろう。こうした古上の陰湿な行動は、古上がリサ子をレイプした結果婚姻関係に至ったという、すなわち性暴力による日常支配の圏域内におけるワン・シーンとして語り手により切り取られ、告発されている。こうしたリサ子と古上の関係性は、後述するような、二世の親たち世代である一世の男性指導者による、二世への侮蔑的な視線の戯画でもあるはずだ。

リサ子が夫の陰湿な暴力への不満を、ユタカに語る場面を見てみよう。

〔略〕 たかが田舎の一私立小学校の教員のくせに、私が左程日本語が出来ない、日本語の六ヶ敷い文字が読めないからと云って威張るな！ 日本語が少し位出来たり読めたりするのはアンタの唯一の商売道具ぢやないか、何が高い教養なもんか！ 私はハワイ生れだからそんなものは出来ないが、その代り私はアンタがさう云って威張るのならアンタの読めないやうな六ヶ敷い英語の本がアンタが日本語をよむよりもっと早く読み了へてちゃんとそれで頭の悪いアンタなんかより理解をしてゐるのですよ！ さう云ってやりたい私は。（略）（「布哇生まれの感情」『ハワイ物語』砂子屋書房、一九三六・一二、三二八頁。以下、「布哇生まれの感情」の引用は同書より行う。）

「左程日本語が出来ない、日本語の六ヶ敷い文字が読めない」一方で、「六ヶ敷い英語の本」なら容易に読むことが出来る、とリサ子がこので自負しているように、リサ子の第一言語は、日本語ではなく英語であると推定される。一九二〇年前後において二〇歳だったリサ子を含む中島世代は、一九一〇年前後に小学校時代を過ごしたことになるが、その当時のハワイの子供たちの日本語能力の実態とはいかなるものだったのだろうか。

そのことを確認していく前に、沖田行司『ハワイ日系移民の教育史 日米文化、その出会いと相剋』（ミネルヴァ書房、一九九七・一）をもとに、一九一〇年前後のハワイの教育界に起きた、教育理念の転換について確認しておきたい。

帝国臣民の育成から日系市民の育成へ

ハワイの日本人学校は、一八九六年四月に奥村多喜衛牧師がホノルルに設立した、日本人小学校を嚆矢とする。この日本人小学校では、日本の文部省検定済の教科書を用いて「日本の教育」を施すことを同校の「規則」に謳っていた。こうした教育方針は、日本に帰ることを前提とした「出稼」という移民形態に規定されたもので、初期の日本人学校に広く分有されていた。例えば、一九〇三年一月に、ハワイ総領事斎藤幹を会長として結成された中央日本人会の「創立趣意書」にも、「日本人小学校を設けて少年子弟に日本国民的教育を施す」ことが主要課題として掲げられていた。そして、こうした教育方針は、一九〇六年一〇月に文部省が発出した「海外在留民ニ対スル帝国政府ノ方針」に、「在外帝国臣民ノ教育ニ付テハ日本国民タル精神ヲ失ハシメス、日本人ノ特徴ヲ益発達」せしめることを日本人学校の主目的と定めていたように、日本政府の意向を汲む形で構想されたものであった。

しかしながら、一九〇〇年にハワイがアメリカの準州となったことは、ハワイの日本人学校にとっても転機となる。第一に、ハワイで出生した児童は、アメリカの市民となり、教育局が許可した学校での教育を受ける義務が発生した。第二に、先述したように、自由移民時代に突入したことで排日運動が抬頭し、「日本の教育」を標榜する日本人学校は、アメリカの同化政策である米化主義運動の最大の阻害要因と認定され、外国語学校を取り締まる法案がいくつも上程されていた。こうしたアメリカ社会の情勢変化の上に、「出稼」から「定住」へという日系移民の形態の変化が加わったことで、ハワイの日本人学校の教育理念は大きく変容していくことになる。

この頃、日本人学校の連絡機関としていくつかの「教育会」が組織されるようになったが、一九〇七年に創立された馬哇教育会は、一九二一年七月、「日系市民として取り扱うものにして、従来の如く単に文部省令のみに準拠せず」とする新しい教育方針を発表している。また一九一五年二月の「ハワイ教育会」創立発会式における奥村多喜衛の演説でも、「日本の文部省指導下における「国民教育」の必要性が明白に否定され、日本人学校の教育目的は米化主義を前提とした「日本語教育」にある⁸⁾とされた。中島直人が通った本願寺布教団に属す学校も、当初は「国民教育」を施す方針を強く打ち出していたものの、中島が通学し始めた正にその頃から、次第に「日本語教育」とその軸足を移していったのである。

さて、このように一九一〇年前後のハワイの教育界では、〈帝国臣民の育成から日系市民の育成へ〉（国民教育から日本語教育へ）という教育理念の大転換が行われたのであるが、実際の子供たちの日本語能力の実態とはいかなるものだったのだろうか。

今村恵猛・宮本一男

本願寺布哇布教総監今村恵猛（一八六七―一九三二）の談話「布哇の日本小児」（『東京朝日新聞』朝刊、一九二一・六、五面）は、そうした疑問に一定の解答を与えてくれる。

今村は一八九九年にハワイに渡り、本願寺布教団に属す学校を設立した人物である。同談話によれば、一九一一年当時、ハワイ全島に九〇の日本人小学校があり、うち本願寺布教団に属す小学校は三六あった。中島もまた、アメリカのパールシティ公立学校へ通いながら、ポリリシチー本願寺学園という日本人小学校に通っている。本願寺布教団附属の小学校では、アメリカの公立小学校での学習の妨げにならないよう、「午前九時前と午後一時半後の朝夕二回の授業が行われ、科目は「国語を主として日本地理及び歴史、唱歌、体操等」だった。

今村によれば、「布哇に生育せし児童の国語を解せざることは驚くべき程」で、「学校は父兄に注意してせめては家庭に於てのみも日本語を使用せしめんと努めつゝ、あれ共」「喧嘩でもする時には直に日本語を捨て、英語を取ると云ふ実情」だったという。すなわち、家庭での親子（一世と二世）の会話においてすら、日本語の使用は限定的であり、子供たちが反射的に話すのは英語だったというのである。

一九〇〇年前後に生まれた中島世代の日系二世の証言もここで参照しておこう。一九〇〇年、ハワイ島オーラーに生まれた宮本一男は、スタンフォード大学・

ワシントン大学医学部・東京慈恵会医科大学を卒業した医師で、アメリカでの強制収容所体験（一九四一―四五）も持つ。宮川の自伝小説『ハワイ二世物語』（同朋協会、一九六八・四）には、次のようにある。

（稿者注、ハワイにおける）日本人の社会は、家に帰っても満足な日本語を話すことも聞くこともできなかった。子を持つ親たちは、日本語が話せぬ子供の将来が心配の種であった。たとえ英語は上手になっても、成人して後に日本語が話せぬようでは、日本人として恥かしい思いをするだろうし、また水準以上の社会人になれそうにもない⁹⁾。

この証言もまた、家庭内における日本語使用の機会が少なかったことを裏付けるものであり、ここからも英語ばかりが上達して日本語が「話せぬ」という子供たちの実態が見えてくる。ただし、二世たちが日本語を話せないことは、親たちの「心配の種」であり、親たちの「恥ずかしい」といった感情の要因になっていたことが判る。とはいえ、それらは子供たちが日本に帰還し帝国臣民として生活することを想定した「心配」や「恥」の観念ではなく、あくまでもアメリカ社会に定住し、日系市民として生きていく上での日本語の必要性の主張であり、それは「米化主義を前提とした「日本語教育」を提唱したハワイの教育界の動きともパラレルなものだったといえるだろう。

一九二四年移民法がもたらした認識論的転換

だが、やはり中島世代の日系二世であり、中島の生地ワイパフに隣接するエワの砂糖プランテーション労働者の家庭に生まれた坂本正雄（一九〇三―八八）は、教育界の一世指導者や親たちが、二世の「日本語教育」を切実なものとして自覚するのは、もう少し時代が下ってからだったと指摘している¹⁰⁾。

坂本によれば、一世の指導者たちはもともと、「日本語教育などには要らない宜しく先づアメリカの国語を学び、アメリカの風習に同化すれば良いと考へ¹¹⁾」ていたものであり（こうした坂本の認識は、被教育者としての坂本の実感であり、当時の一世たちが「米化主義を前提とした「日本語教育」の必要性を主張していたことは先に見た通りである）、二世たちの日本語能力も低調なものだった。他方、「今日二十歳前後」となった中島世代の二世たちもまた、「アメリカのシテズンとしてアメリカの事業界に没頭して行こう¹²⁾」と考えていた。ところが、一九二四年移民法が施行されるに至って、「いか程米国に迎合しても日本人は所詮ア

アメリカで心から歓迎されるものではないと云ふ事¹³⁾を、日系人社会が理解せざるを得なくなるという認識論的転換が起こったという。二世たちは、アメリカの大学を出てもアメリカ社会に職を得られないことに気づき始める。やむなく日本企業のアメ리카支店などに就職するのだが、日本語が不自由なことが大きな障壁となることに愕然とさせられる¹⁴⁾。親たち一世は、二世のアメ리카社会への同化のために、日本語での親子の会話を犠牲にするという大きな代償を払ってきたが、全ての努力は水泡に帰したことを悟るのである。

すなわち、一九二四年移民法がもたらしたパラダイムの転換が、ハワイを含む北米の日系二世に対する「日本語教育」の必要性を真に自覚させたのだと坂本は指摘する。ただし、こうした「日本語教育」の必要性の自覚が、単なる語学力の向上を目指したものではなかったことについては次節で述べる。

「翻訳小説」

ハワイの日系二世の年間出生数は、一八九八年に四一五人、中島家がハワイに渡った一九〇二年に一、六〇五人、翌一九〇三年にいったんピークをむかえ三、四三七人、中島が出生した一九〇四年は二、四九〇人、その後はやや上昇傾向で一九一〇年には三、七二三人と、一九〇〇年頃を境にその数を確実に増やしていった¹⁵⁾。ただし、今村・宮本・坂本の証言を踏まえると、急速に増加する二世に対する日本語教育は一九二〇年代半ばまで十分に行われておらず、その原因は、アメリカ市民である二世のアメ리카社会への同化を優先しなければならぬとする一世たちの強固な認識があった。そのため、一九二〇年代半ばまでの二世たちにとって、日本語は母語の一つであるにしても、第一言語は英語という状況が一般的だったと考えられるのである。

三郎が海へ投じた「手紙」を一目見て、ユタカは「それには下手な日本文字で次のように書かれてありました」と述べており、また三郎の「手紙」に、「私は英語の方は達者ですが、下手でも何でも私の最愛の妻ナナ子に暇々に教へてくれた日本語」などあることから、三郎の第一言語もリサ子と同様に英語であるとする事が出来るだろう。三郎は、自身の日本語は日本出身の妻から教授されたものとしており、三郎の両親や日本人学校のような教育機関から授けられたという認識はない。

すなわち、日本語で書かれた三郎の「手紙」には、一度英語で構想された文章を日本語に翻訳するという行程が、その言説の水面下に包摂されている。逆にユタカとリサ子の二世同士の会話は、英語でなされていたと考えるのが自然であり、

物語言説においてそれらの会話が日本語で表記されるのは、英語から日本語へと語り手の「私」による翻訳の営為がそこに介在していることを示している。またそのことから、第一言語を英語としてきたユタカが、流暢な日本語で「布哇生まれの感情」という物語言説を語ることができるようになるまでの、日本における長い時の流れというものが暗示されているといえるだろう。

酒井直樹は、日系二世小説家ジョン・オカダが英語で書いた小説『ノー・ノー・ボーイ』(一九五七)を分析する中で、日系二世の視点人物イチローと、片言の英語しか話せないとされる彼の両親との会話が英語で進められている、すなわち、両親の発話が日本語から英語へと実は翻訳されていることに着目し、「翻訳はこの小説作品の核心的主題にかかわっている」¹⁶⁾とする。その意味で『ノー・ノー・ボーイ』は「翻訳小説」¹⁷⁾だというのが、布哇生まれの感情」も正しく同じ意味の「翻訳小説」であるに違いない。登場人物たちの言語の境界、すなわち、翻訳された部分とそうでない部分の境目はあるはずだが、それを見つけることは困難だ。そこにあるのは、「ある特定の言語への一義的な帰属関係を絶たれた者の言葉」¹⁸⁾の「漂流」であり、そうした事態の根源には、二世たちの「マージナル・マン」としての〈属性なき属性〉があるはずである。

四、「マージナル・マン」としての二世

〈属性なき属性〉

シカゴ学派の中興の祖ロバート・E・パークは、論文「人間の移住とマージナル・マン」(一九二八)において、日系移民を含む世界的な人口動態について調査している。そこでパークは、「人種間の文化的同化の主な障害は、異なった精神的特性ではなくして、むしろ異なる身体的特性である」¹⁹⁾と主張し、そうした身体的特性を持つ移民(パークは日本人を「黄色い危険」²⁰⁾と呼んでいる)を、「決して完全には相互浸透し、一つに融け合うことのない二つの文化、二つの社会の境界に生きる人間」²¹⁾「マージナル・マン」と位置づけた²²⁾。パークの理論で重要なのは、「マージナル・マン」としての移民が移民先の社会はもとより、祖国でも「余所者」²³⁾扱いされ、結果的に行き場を失うと指摘した点にあるだろう。パークのマージナル・マン理論を移民二世の問題にまで広げたのは、パークの弟子のエベレット・V・ストーンキストである。ストーンキストは、彼の著書 *The Marginal Man* において、アメリカ社会への移民二世の同化を最も促進するのは「学校」であると主張している。二世の子供たちは、言語・食事・衣服・遊びな

どあらゆる事柄において、同級生の基準や見方に同化しようとする一方、両親の助言や権威を拒否し、両親を「外国人」として軽蔑し、家族の名前を否認することさえあるとする⁽²²⁾。ストーンキストが例として挙げるのは、ハワイの日系二世の次のような証言である。

日本人は、二世であれ、一世であれ、疑惑の眼差しで見られている。白人を支持し、オリエンタルを抑圧する不文律が存在している。私たちはアメリカ人とは見なされない。私たちはエイリアンとみなされ、人々は私たちが常に日本人であり続けると信じている。一方、二世の私たちは両親にとっても外国人だ。われわれは〈ロスト・ジェネレーション〉なのである！⁽²³⁾

ストーンキストの指摘で決定的に重要だったのは、二世たちは、アメリカ社会及び親たちの祖国の社会のみならず、同じ移民社会の両親一世たちからも、「エイリアン」として疎外される絶対的他者であるとした点にあるだろう。そして、ストーンキストがその典型的事例として、日系二世を引き合いに出していることは見逃せない。事実、一九二〇年代半ば以降の日系社会において、二世は日系社会を窮地に陥れる、いわば〈自滅の種〉として「問題」視されていくことになるのである。

二世問題

日系二世という存在は、アメリカ人や祖国の日本人はもとより、親たち一世によっても、ホミ・K・バーバのいう「擬態」⁽²⁴⁾の戦略を体现した、「ほとんど同一だが完全には同一ではない差異の主体」⁽²⁵⁾と認識され、矯正の対象とされるようになっていく。バーバによれば、「権威」に対し「擬態」を行う時、それは単なる模倣でなく、「権威」が提示する「規範をめぐる別の認識を生み出す」がゆえに「茶化し」にも近いものとなり「擬態」とはこの両面価値的な戦略である⁽²⁶⁾、「権威」に対する「深刻な攪乱効果をもつ」とされる⁽²⁶⁾。

東栄一郎によれば、一九二〇年代半ば以降、「多くの一世は、二世の間にある『過度のアメリカ化』を疑問視し、『アメリカの『快樂主義』や浅薄な『拝金主義』の盲目的な模倣が、彼らの基本的規律を拭い去った』と考えるようになっていったという⁽²⁶⁾。この場合の『基本的規律』とは、『日本精神』すなわち日本の社会的倫理や規範」⁽²⁷⁾を指すが、この頃より多くの日本人学校が、教育内容の重心を「言語教育から道徳教育へ」⁽²⁸⁾と移行させていったと東は指摘する。一九二

四年を分水嶺に二世への「日本語教育」の必要性が声高に叫ばれ出したとする坂本の回想は既に確認したが、坂本の指摘した一世たちの二世に対する日本語教育熱は、単なる語学力向上の要求ではなく、二世が「日本精神」という「規範」を内面化し、「帝国臣民」としての自覚を持つことを促すものだったといえるだろう。すなわち、一九二四年移民法が施行されるまでは、一世は二世に対しアメリカ社会への同化を推進してきたが、施行後は一転して二世の行動を「過度のアメリカ化」として批判し、自分たち一世（「帝国臣民」）の「規範」の「模倣」を要求するようになっていったのである。だが、〈帝国臣民の育成から日系市民の育成へ〉という教育方針の転換が一九一〇年前後に行われていたとすれば、二世たちは、二転三転する一世たちの「模倣」対象の転換の要請に翻弄されてきたことになるだろう。いわゆる〈二世問題〉は、一世のこうした矛盾とも思える要請にうまく応答できなかった二世のことを、一世（「帝国臣民」）の「権威」を「攪乱」する危険な集団と認定した、一世たち自身の不安心理の表徴だったと考えられる⁽²⁹⁾。

それゆえ、感情的とも思える文言による二世批判が、日本国内外の〈親たち〉世代の「帝国臣民」によって行われていくこととなる。

〈自滅の種〉

辻村良衛「北米に於ける日本人第二世の問題」〔『海外』一九二八・一一〕は、日本企業の採用人事に精通している「其道の人」の意見を紹介している。すなわち、二世は「どつちつかずの『ハンパ』者であるのみでなく、第一世諸君が常に憂いてゐる所の一つの欠点、六つかしく言へば大和魂」が「著しく欠けてゐる」から採用しないという⁽³⁰⁾。

ここでは「大和魂」の欠如が問題視されているが、二世を表象する言説が共有しているのは、この〈欠如の論理〉である。

衆議院議員小西和「苦境に沈潜する在米同胞」〔『海外』一九二九・八〕では、一世が持ち合わせていた「遠大の計画を確立して、奮闘努力するの勇氣」の欠如が指摘され、「放浪的生活」を送る二世の姿を「浮草」と表現している⁽³¹⁾。宮本圭三「北米の日本移民第二世に関する閑話」〔『海外』一九三〇・二〕では、二世のことを、「この連中は今、全く持てあまされてゐるのだ」「下等遊民」などと罵倒し、二世が日本企業に採用されない理由を、「頭が物質万能に出来てゐる」というアメリカ人特有の性格に求めているが⁽³²⁾、こうした本質主義的認識もまた、「帝国臣民」なら持つていて当然の「規範」意識の欠如を難する言説に他ならない。

このように一九二〇年代後半以降、二世を「ハンパ」者「放浪」「浮草」「下等遊民」などとマージナルな存在として表象し、日本・日系社会で要求される諸々の「規範」を欠いた矯正を要する不完全な他者、あるいは日本・日系社会を崩壊へと導く〈自滅の種〉などと認定していくような言説が登場してくる。

「布哇生まれの感情」が執筆されたのは、こうした〈欠如の論理〉が横行する情勢下においてであり、それゆえそうした情勢に対する中島の何らかの応答でもあったであろう。とはいえ、茅原華山が二世への同情を表明した一九一六年段階の文章の中で、「若し排日熱がこの上にも継続したならば」「米国魂と日本魂とが不断に其日本人種米人を不眠不休の状態に置くであらう、我は涙なしには此事を考へられない」³³と正しく予測していたように、二世の〈属性なき属性〉というよりべなさそれ自体は、一世が「問題」視する以前の一九一〇年代半ばには既に、二世にとっては内在的かつ本質的な「問題」として意識されていたことだった。

次節では、三郎が一九一七年に「太平洋沿岸同胞諸君」に宛てて海へと投下Ⅱ送信したボトル・メッセージというメディアの意味について考察することを通して、「布哇生まれの感情」が追究する二世のアイデンティティの問題について検討を加えたい。

五、漂流するシニフィアン

再帰的虚構性

ボトル・メッセージというコミュニケーションの形式は、確実性を要求される郵便制度の埒外に配置されるその非日常性・不確定性により、常に偶然のロマンを纏っている。いつ・どこに・誰に届くのか不明であるばかりか、ボトルが破損するなどして誰にも届かないかもしれないという脆弱性を、その基本性格として併せ持つ。それゆえ、幾星霜を経てメッセージが配達された場合、しばしば、その漂流の年月や移動距離の長大さに比例して増幅された感動が、人々にもたらされることになる³⁴。

同様に、三郎のボトル・メッセージも、そうした非日常性・不確定性・脆弱性に裏打ちされた偶然のロマンを纏っていたはずだが、銅製の円筒に封入されたメッセージを読み終えたユタカの反応は、「飛んでもない妄想狂ではないかと思つた」(二三三頁)、「いささか持て余し気味の円筒」(三四四頁)などと、極めて素っ気ない。ユタカがこうした反応しか示し得なかった一因については、三郎のメッセージが保有する自己再帰的な虚構性に求めることができるのではないだろ

うか。

葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」(『文芸戦線』一九二六・一)の物語内容は、セメント工場の労働者松戸与三が、セメント樽の中に封入された女工の手紙を読むことで、自身の生き方を見つめ直すというものだが、同小説を分析した加藤邦彦は、それが「手紙の真偽の明確な根拠とはならない」としつつも、「今まさに女工は手紙を書いているのに、それをセメント樽のなかに入れたことが過去のこととして書かている」事実から、女工の手紙の虚構性ということを描いている³⁵。

非日常性・不確定性・脆弱性といった性格を分有する女工の手紙は、ボトル・メッセージの亜種といつていいだろうが、そうした広義の〈ボトル・メッセージ〉が物語の推進力として機能するというプロット構成において、同時代的に広く読まれた葉山の同小説が「布哇生まれの感情」に影響を与えたという可能性は否定できない。もちろんそのことは推測の域を出ないのだが、三郎のメッセージにも、加藤が指摘した意味での虚構性が内包されている。すなわち、三郎が海へと投下した円筒が「月の光を浴び」ながら流れていくのを見送る三郎自身の様子が、「私は瞬間眼をつむりました。何故か泪が次から次へと湧き出て来ました」(三三四頁)などと自己再帰的にメッセージに書き込まれているのである。仮に、メッセージに書き込んだ通りの出来事がその後生じたのだとしても、すなわち、結果的に書いたことが実行されたとしても、それは、三郎が机の上でメッセージを書いた時点においてはいまだ生起していない未来の出来事について想像的に書いたものであり、このメッセージ自体が虚構を伏在させているという事実を回避するものではない。

ユタカが三郎の「妄想狂」を疑わざるを得なかった理由は、そうした仮構性を露出させた三郎の語りの内に既に胚胎されていたのである。

虚構の存在としての受取人

ただし、「布哇生まれの感情」に見られた再帰的虚構性とは別に、全てのボトル・メッセージはある種の虚構性を帯びているということが、次のジジエクの議論を参照すれば明らかになるだろう。ラカン派精神分析学をベースに現代批評を行うスラヴォイ・ジジエクは、エドガー・アラン・ポーの小説「盗まれた手紙」(一八四四)を素材に「手紙はかならず宛先に届く」とする主張を展開したジャック・ラカンに対し、ジャック・デリダが「手紙は宛先に届かないこともありうるのではないか」と反論した著名な論争について論じた文章の中で、ボトル・メッセージに内在的な性質について次のように述べている。

受取人のない手紙、すなわちドイツ語で *Faschenpost* (瓶入り通信) と呼ばれる、船が難破したときに無人島から瓶にいでて海に投げ込むメッセージのような、限界的な例においてはとくにそうである。手紙は発信された瞬間に、つまり海に投げ込まれた瞬間に真の宛先に届くということを、この極端な例は最も純粹かつ明瞭に物語っている。その真の受取人は、その手紙を受け取るかもしれないし受け取らないかもしれない経験的な他者ではなく、大文字の〈他者〉すなわち象徴的秩序そのものである。〈他者〉はその手紙を、手紙が循環内に投げ込まれた瞬間、つまり送り手がそのメッセージを「外在化」し、〈他者〉に向けて発信した瞬間、すなわち〈他者〉が手紙を認め、それによって送り手からその手紙に対する責任を取り除いた瞬間に、手紙を受け取るのである⁽³⁶⁾。

ラカンによれば、人間は成長するに従って、「象徴界」という言葉(シニフィアン)が支配する法の世界へと入っていくのだという。そして、そうした規範・秩序としての法、ないし法の制度を代表するものを、大文字の〈他者〉と呼ぶのだが、ジジエクの同文章では、「国家、民主主義、党、神、など」⁽³⁷⁾が、大文字の〈他者〉として挙げられている。

ジジエクはこうしたラカンのジャーゴンを用いて議論をすすめる。すなわち、特定の個人という実体的ないし経験的他者を宛先に持たないボトル・メッセージにも、大文字の〈他者〉＝象徴的秩序という「真の宛先」があり、海へと投下＝送信した瞬間に宛先に届くというのだ⁽³⁸⁾。三郎のボトル・メッセージは、ユタカのもとに偶然届いたことで、ユタカという経験的他者を受取人とする事ができたわけだが、三郎が恐れたように、ボトル・メッセージが例え「ふかに吞まれて駄目にな」(三三四頁) った場合でも、「〈他者〉に向けて発信した瞬間、すなわち〈他者〉が手紙を認め」というジジエクの思考によれば、三郎が「ロスアンゼロス」の夜の海に投下するという行為の次の刹那に目的は達成されていたことになる。

実際、三郎は「ふかに吞まれ」るなどして経験的他者という受取人が不在となった場合でも、「あの日以来、海にボカボカ浮いてゐると思ふだけでも私に取つては無上のなくさめです」(三三四頁) としているのであり、三郎に宛てた返事を円筒に入れ直し、海へと投下したユタカもこれと全く同じ心境にあった。ユタカは三郎という経験的他者に届くはずもないことを知った上で、「しかし私も彼と同様、彼の切なる要求に応じて円筒を海に投げ入れたといふ事だけで、すでに十

分満足でした」(三四五頁) としているのである。

このように、ボトル・メッセージという経験的他者を宛先に持たないコミュニケーションの形式も、何らかの概念的他者という虚構の存在とのコミュニケーションを前提とする行為であるがゆえに、全てのボトル・メッセージはアプリアリに虚構を伏在させているということが言えるのであり、そうした虚構の存在が受取人として常にいるからこそ、投下＝送信という行為が二人を「なくさめ」たり、「満足」させたりしてくれるのである。

〈あなた〉へのメッセージ

では、三郎はボトル・メッセージを、誰に向けて投下したのだろうか。すでに確認したように、三郎のメッセージは「太平洋沿岸同胞諸君」に宛てられていたのであり、一見して極めて広範囲に居住する日本人・日系人が宛先として該当するようである。ただし、「只一つの欲を云へば、日本へ一つでもいいから届いてくれる事です。しかしそんな望みは到底駄目です」(三三四頁) という三郎の記述からは、宛先として想定されているのが、日本列島に居住する日本人としての「あなた」という局限の対象であることが理解される。しかも、「しかしそんな望みは到底駄目です」と述べているように、日本列島に居住する日本人に配達されることは物理的に不可能であることが承知されていたのだから、三郎が想定していた「あなた」とは、概念的他者＝大文字の〈他者〉としての日本・日本人・日本語(以下、〈あなた〉)に他ならなかったといえるだろう。

そもそも日本を見たことがなかった三郎が、ボトル・メッセージを〈あなた〉に送らなければならなかったのは、妻とのお腹にいた子供とをスペイン風邪で亡くした喪失感が、そうすることで「なくさめ」られると考えたからである。「日本に生まれたと称する女を女房に持つて憧れの日本を思つてゐました」(三三二頁) とあるように、日本人女性と婚姻関係を結ぶことで、三郎は日本への帰属意識をかううじて繋ぎ留めていたが、妻の死はそうしたアイデンティティの紐帯を断つものだった。三郎にとって妻は、家庭内にいる経験的他者としての日本人であり、同時に〈あなた〉という大文字の〈他者〉の代理でもあることで、三郎は妻を介して〈あなた〉という虚構の存在との繋がりを担保し得たのである。

妻のそうした役割は、三郎に日本語を授けたことに集約される。ラカンは、「言語」を修得した状態で生まれてくる人間など存在しないという事実から、「言語」を主体とは絶対的に異質な大文字の〈他者〉の一翼としたが、日本語を第一言語としない三郎にとって、日本語は二重の意味で、〈他者〉の言語、あるいは〈他

者」そのものだった。日本語を授ける妻は、三郎を〈あなた〉のシニフィアンのネットワークに誘うことで、三郎に〈あなた〉の社会の枠組みとしての規律訓練システム（規範）を内面化させ、〈あなた〉の世界への通路を開示する役割を担っていたのである。

それゆえ、〈妻の死〉が意味するところは、愛するパートナーという経験的他人を失ったということに留まるものではない。それは、三郎が日本人としての主体性Ⅱ統一した身体イメージを構築する上での随伴者Ⅱ〈あなた〉を見失うことを意味していたのであり、三郎の喪失感の内実は、獲得しようとした日本人としての主体的中心を紛失した「マージナル・マン」としての不安であったとすることができるだろう。

ゆえに、ボトル・メッセージを送ることが「なぐさめ」になる地点とは、受取人が常にいてくれるということに加え、受取人として〈あなた〉が想定されるような場所なのである。逆の言い方をすると、実際には受取人が誰であろうと、あるいは受取人がいなかろうと、必ず〈あなた〉に配達されると考えるから、「なぐさめ」になるのである。だからこそ、「私は英語の方は達者ですが、下手でも何でも私の最愛の妻ナナ子に教へてくれた日本語の方がこの場合どの位私の気持ちをしつくりさせてくれるか知れません」（三三四―三三五頁）とあるように、三郎は英語ではなく、妻が授けてくれた日本語でメッセージを書くことにこだわる必要があったのである。

「夢の国」日本

しかしながら、実際には三郎のメッセージが日本列島に居住する日本人に届くことは当然なかつたのであり、同じ二世のユタカの手許に配達され、留め置かれてしまう。そのことは、三郎の投下Ⅱ送信という行為が、「なぐさめ」という象徴の意味以上のこと、いわば日本人としての主体的中心を回復し、「マージナル・マン」の状態を脱することには決して連続して行かないという現実を暴露している。すなわち、三郎の銅製の円筒に内包されたシニフィアンは、必ず〈あなた〉には届くが、現実は何も変わらない。それゆえ、彼自身が「マージナル・マン」の状態を脱することができないという意味において、三郎あるいは三郎の日本語で書かれたメッセージは、「ある特定の言語への一義的な帰属関係を絶たれた者の言葉」（酒井直樹）として、〈漂流〉し続けなければならないのである。

このような三郎の身に起きた〈妻の死〉Ⅱ〈あなた〉の紛失という事態はしかし、三郎の個人的な体験などではなく、一九一〇年代後半以降の全ての日系二世男女

が経験した出来事でもあったであろう。少なくとも「布哇生まれの感情」に登場する、ユタカ・リサ子・三郎という、三人の二世たちは、異口同音に日本への「憧れ」を表明していたのであり、一九三〇年代半ばの時点で四、〇〇〇名の二世が「留学生」として日本に滞在するに至るのである³⁹⁾。もちろん、日本へと渡る理由は様々であつたろうが、日系社会の内部においても「規範」を欠いた不完全な他者とされた二世たちの中には、祖国日本を楽園のような場所としてイメージしていた者も多かつたのではなかつたろうか。三郎の「あなたをもつとも感動させた事柄は（ロマンズ大いに結構です）どんな事ですか？」という問いに対し、次のような返事を書いて、海へと投下したユタカも、そうした二世の一人に他ならない。

ミィはハワイ生れの少年。生れて十六年始めて日本を見ました。これは夢ではありません。富士山が裾をばかして倒さ^{さか}です。そして今に数時間たてば、私は見事、母国の陸地を第一歩に於て踏みしめる事が出来るのです

一六歳の「少年」ユタカは、富士山を見たその時を、人生で「もつとも感動」した瞬間とするのだが、「富士山が裾をばかして倒さです」という文章は、「富士山は日本一の山、あだかも扇子を倒さに立て、之れを眺むるが如し……」というユタカが愛読している『日本よろづ案内』の一節（物語にも引用されている）を踏まえないければ意味が通らない。すなわち、ユタカにとっての日本は、『日本よろづ案内』のような言説によつて構成されたイメージとしての日本であり、多分に理想化された共同体であつたのである。

「布哇生まれの感情」は、このユタカが高揚する場面で終わっているが、そうしたイメージとしての日本は、いうまでもなく〈現実〉の日本に直面することで直ぐに崩壊してしまうことになるだろう。

中島直人は、ユタカと同じ数えで一六歳の時、日本に渡っているが、その時の様子を次の「赤瓦」の人種」という文章に綴っている。

日本は秋で、寒さも相当だつたが、汽車に乗つて沿線の赤い柿のなつた秋景色を眺めながら、母からいよいよ近づいて行く熊本の家のことなど、まるで子守唄のように小さいときから聞かされてゐたこの長い／＼夢の国の話の美しい最後の頁へ来たかの如く私達に云ひ聞かせるのであつた。しかし、村へ来て「わが家」を見ると、私は何とも云へない悲しさに襲はれた。（中略）

そこには壁の土は落ち竹垣は毀れ名も知らない雑草のほしいままにはびこつた一箇の廃屋があるのみであつた⁽⁴⁶⁾。

母から「夢の国」と聞かされていた日本の「わが家」が「一箇の廃屋」であつたことに象徴されるように、日本での〈現実〉は、中島が持っていた「美しい夢を一枚／＼風に剥がれるやうに奪つて行」⁽⁴⁷⁾／＼ことになる。中島は、「美しい夢」を奪つた日本の〈現実〉について、この文章の中でことさら書き連ねるようなことはしていないものの、「ハワイ帰り」を意味する「赤瓦」の人種」という表題は、日本で異「人種」(「エイリアン」)として扱われてきた中島の生活というものを含意なく連想させる。

そのような「帰国後」の〈現実〉を経て、中島が「布哇生まれの感情」で描こうとしていたのは、夢と希望に満ち溢れた「少年」の姿ではなく、未来に立ちほだかる〈現実〉を知らない「少年」の姿であつたに違いない。

注

- (1) 『日本近代文学大事典』(第二巻、講談社、一九七七・一一)における中島直人の項目(東郷克美執筆)を参照すると、「熊本県出身の移民の子としてハワイのオアフ島に育つた彼は、そのハワイでの思い出を同人誌『1929』に書いて川端康成に認められた」とある。一方、日比嘉高作成の「中島直人著作目録稿」(ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所 新曜社、二〇一四・二)には、「すゑぎゆう」『1928』、未見」とある。『1929』は『1928』の後継誌だが、いずれも小数部しか発行されなかったと推測され、完本の形で所蔵している図書館・文学館はなく、稿者も存在を確認できていない。ただし、「すゑぎゆう」は中河與一編集主幹の『新科学的文芸』(一九三二・一一)に再録されたようである(当然のことながら異同は確認できていない)。このことから『1928』なごし『1929』に発表された「すゑぎゆう」は、当時もほとんど読まれる機会がなかったと推測される。そこで本稿は、「布哇生まれの感情」(『文芸都市』一九二九・七)を実質的なデビュー作と位置づける。
- (2) 高木(北山)眞理子「ホノルルにおけるエスニック居住区の形成と変化―日系居住区のマノアとモイリイリに注目して」『人間文化』二〇一〇・九、九九頁
- (3) 前掲、高木(北山)「ホノルルにおけるエスニック居住区の形成と変化―日系居住区のマノアとモイリイリに注目して」九九―一〇〇頁
- (4) 前掲、高木(北山)「ホノルルにおけるエスニック居住区の形成と変化―日系居住区のマノアとモイリイリに注目して」九九頁
- (5) 入江寅次「邦人海外発展史上巻」(原書房、一九八一・一一、復刻原本一九四二刊)によれば、一九〇二年から一九〇七年移民法により転航が禁止されるまでの六年間の転航者数は、三八、三〇六人にのぼつた(四四八頁)。
- (6) Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation*. London: Routledge, 1992.
- (7) 物語の中に入れ子式に挿入されてくる三郎を差出人とする「手紙」には、妻を二週間前にスペイン風邪によるパンデミック(一九一八―一九)で亡くしたという記述とともに、「一九一七年三月二日」という日付が記されている。パンデミックの時期を考慮すると、日付は少なくとも一九一八年以降でなければならず、矛盾が生じる。そこで本稿は、物語内容の時間を一九二〇年前後とやや大きな振り幅をもたせて考察することとする。
- (8) 沖田行司「ハワイ日系移民の教育史 日米文化、その出会いと相剋」ミネルヴァ書房、一九九七・一、一六八頁
- (9) 宮本一男「ハワイ二世物語」同朋協会、一九六八・四、二六頁
- (10) 一九三〇年代以降の坂本の言論活動については、物部ひろみ「ハワイ日系二世のアイデンティティと政治参加―一九二〇年代から一九三〇年代の指導者たち」『日系人の経験と国際移動 在外日本人・移民の近現代史』(米山裕・河原典史編、人文書院、二〇〇七・三、九〇―九五頁)を参照されたい。
- (11) 坂本正雄「在米同胞の祖国崇拜―排日移民法通過実施後の新傾向」『日本及日本人』一九二八・一、二二頁
- (12) 同前
- (13) 前掲、坂本「在米同胞の祖国崇拜―排日移民法通過実施後の新傾向」二三頁
- (14) 時期は下るのであくまでも参考程度の情報だが、一九四〇年二月発行の『在米日本人史』(在米日本人会)に「二世の九十九パーセントは日本人社会にその職業を求めねばならなくされてゐる」(一一〇六頁)とある。
- (15) 川崎壽「ハワイ日本人移民史 1863-1952 (明治元年―昭和二十七年)」ハワイ移民資料館仁保島村、二〇二〇・三、一一六頁

- (16) 酒井直樹「偏在する国家―二つの否定：『ノー・ノー・ボーイ』を読む」『死産される日本語・日本人 「日本」の歴史・地政的配置』講談社、二〇一五・五、一五五頁
- (17) 前掲、酒井「偏在する国家―二つの否定：『ノー・ノー・ボーイ』を読む」一五四頁
- (18) 前掲、酒井「偏在する国家―二つの否定：『ノー・ノー・ボーイ』を読む」一五五頁
- (19) ロバート・エズラ・パーク「人間の移住とマージナル・マン」『実験室としての都市 パーク社会学論文選』町村敬志・好井裕明編訳、御茶の水書房、一九八六・二、一〇六頁
- (20) 前掲、パーク「人間の移住とマージナル・マン」一〇九頁
- (21) 同前
- (22) Everett V. Stonequist. *The Marginal Man: A Study in Personality and Culture*. New York: Charles Scribner's Sons. 1937. 98-99.
- (23) Stonequist 103-104.
- (24) ホミ・K・バーバ「擬態と人間について―植民地言説のアンビヴァレンス」『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳、法政大学出版局、二〇〇五・二、一四八頁
- (25) 前掲、バーバ「擬態と人間について―植民地言説のアンビヴァレンス」一四八―一四九頁
- (26) 東栄一郎「世代をめぐる問題―将来に向けた二世の教育」『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで 忘れられた記憶 1868-1945』長谷川寿美監訳、明石書店、二〇一四・六、二二二頁
- (27) 同前
- (28) 同前
- (29) いわゆる〈二世問題〉は一九二〇年代後半に話柄となり、一九三〇年代には佐藤伝「米加に於ける二世の教育」（自彊堂、一九三二・四）、山田辰實『海外第二世問題』（輝文堂、一九三六・二）などの学術書が刊行されるなど、教育者や教育学の研究対象となっていく。
- (30) 辻村良衛「北米に於ける日本人第二世の問題」『海外』一九二八・一一、一二五頁
- (31) 小西和「苦境に沈潜する在米同胞」『海外』一九二九・八、四〇頁
- (32) 宮本圭三「北米の日本移民第二世に関する閑話」『海外』一九三〇・二、七七頁
- (33) 茅原華山「第二世の煩悶」『日本評論』一九一六・一二、八頁
- (34) "Oldest Message in a Bottle Found on Beach." *BBC News*. 6 March 2018. (最終閲覧日：二〇二〇・九・一一)。一八八六年にインド洋で投下されたボトル・メッセージが、一三二年という時間を経て、約一八〇キロ離れたオーストラリアの海岸で発見されたことがニュース記事となっている。ドイツの輸送用小型帆船パウラ号が投下した海洋調査用のボトル・メッセージであり、内容において人を感動させるものではないにもかかわらず、驚きと感動とをもってニュース記事となったのは、その漂流の年月・距離の長大さゆえであろう。
- (35) 加藤邦彦「届けられた手紙、送られる返信―葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」論―」『梅光学院大学論集』二〇二一・一、一五頁
- (36) スラヴォイ・ジジエク「手紙はかならず宛先に届く」のはなぜか『汝の症候を楽しめ―ハリウッドVSラカン』鈴木晶訳、筑摩書房、二〇〇一・七、二六頁。原典 (Slavoj Žižek. *Enjoy Your Symptom!*. Jacques Lacan in *Hollywood and out*. New York & London: Routledge, 1992. 10) を確認したが、「Faschenpost」ではなく「Flaschenpost」が正しい。
- (37) 前掲、ジジエク「手紙はかならず宛先に届く」のはなぜか「三二頁
- (38) 東浩紀は、ラカンが「不可能なもの」への思考の歴史を再構成し、さまざまな哲学的・文学的言説からその痕跡を探してきては、それをひとつの流れへと統合してしまう」とし、デリダの批判は、そうした「ひとつの流れ」＝象徴界の論理へと問題を収斂させるところに向けられていたと指摘している（『存在論的、郵便的―ジヤック・デリダについて』新潮社、一九九八・一〇、九八頁）。ジジエクのボトル・メッセージについての考察に対しても、東は同様の批判を行うであろう。ただし、ジジエクの考察はボトル・メッセージに内在する虚構性の問題を浮き彫りにする手がかりを提供していると、本稿は考えている。
- (39) 東栄一郎「移民の国際主義の報い―祖先の国の二世」『日系アメリカ移民二つの帝国のはざままで 忘れられた記憶 1868-1945』長谷川寿美監訳、明石書店、二〇一四・六、二四一頁。ただし、東は「確かな統計はない」としている。
- (40) 中島直人「赤瓦」の「人種」『文学生活』一九三六・六、七四頁
- (41) 同前

***The Whereabouts of a Message in a Bottle:
Interpreting Naoto Nakajima's Hawaiiiumare-no Kanjyo
[Born in Hawaii]***

KURODA Shuntaro

In his lifetime, a writer Naoto Nakajima (1904-40) wrote a little less than 20 novels, all of which are about identities as second-generation Japanese-Americans [Nisei]. Nakajima's parents were Japanese, but he was born in Waipahu, Hawaii. Therefore, Nakajima had dual citizenship in the U.S. and Japan. He moved to Japan in 1919 and made his debut as a novelist with *Hawaiiiumare-no Kanjyo* [*Born in Hawaii*] (1929) expressing his "longing" for Japan. He then wrote several novels, all based solely on his own experiences in Hawaii but he returned to Hawaii in 1936. In this paper, I first focus on how education influenced the formation of Nisei's identity. For example, I investigate the changes in the content of education for Nisei by the Nikkei community in the early 1900s. In addition, I analyzed the historical characteristics of Nisei as the "Marginal Man" defined by Robert E. Park in 1928. Finally, I examined the subject of Nisei's identity, which is pursued in *Hawaiiiumare-no Kanjyo*. To this end, I tried to clarify the meaning of the message in a bottle delivered to the main character, Yutaka.